

かわる大麦品種、続々登場！「はるか二条」「しらゆり二条」など

【作物部：45-8807】

佐賀県ではこれまで、麦ごはん、麦焼酎、味噌や麦茶などの原料として、食糧用大麦品種「ニシノホシ」やビール大麦品種「サチホゴールド」が多く栽培されてきました。近年、気象の影響や病害の多発で収量が低迷するようになり、新しい品種の導入が求められていました。

そこで、当センターでは、九州沖縄農業研究センターが開発した品種の中から、多収で品質の良いものを選定し、「ニシノホシ」や「サチホゴールド」の一部と替えていく準備を進めています。

新品種「はるか二条」は「ニシノホシ」よりも2割以上多収の品種で、麦粒の検査等級も良質とされてきた「ニシノホシ」と同等の格付けです。元年度播種面積は、大麦作付面積の28%以上（約2,600ha）になっています。

「はるか二条」の栽培のポイントは、早播きは避けて12月上旬播きとします。播種量は7~8kg/10a、施肥は平坦部で窒素成分で元肥を6kg/10a、1月追肥を4kg/10a、3月追肥を4kg/10aとしており、多収にあわせて追肥の量を「ニシノホシ」よりも1割程度多くしています。赤かび病にかかりやすいため、防除は欠かせません。詳しくは佐賀県のホームページ「佐賀県 施肥 防除 てびき」で検索・参照してください。

また、新品種「しらゆり二条」は、炊飯後の褐変がないプロアントシアニジンフリーの遺伝子を持っています。このような品種は需要量は多くないものの、麦ごはんや白い麦味噌向けとして強い要望があります。過去、同様な品種「白妙二条」が栽培されていましたが、穂発芽しやすく低収であったために生産が中断されていました。「しらゆり二条」は、元年度播種で10haのほ場で試作されています。「しらゆり二条」は「はるか二条」の血を強く引く品種で、収量・検査等級とも「はるか二条」と同等であり、多収が見込めます。

近年、もち性の大麦が食物繊維を多量に含むことから健康志向の消費者に麦ごはん用として注目されています。有望系統「西海皮糯77号」も「はるか二条」の血を強く引くもので、これも多収が期待されています。ほかにも、二条裸麦「西海裸78号」も「ユメサキボシ」の後継品種として、現在10aの試作が行われています。

表 「はるか二条」の施肥基準

耕起畦立て栽培

地域	土壌類型	目標収量	三要素 (kg/10a)			窒素施用量(kg/10a)			備考
			窒素	リン酸	カリ	基肥	中間追肥	穂肥	
平坦	粘土型	480	14	14	14	6	4	4	中間追肥1月上旬、穂肥3月上旬
山麓	壤土型	420	12.5	12.5	12.5	5.5	4	3	

全面浅耕平畦ドリル、全面全層播栽培

地域	土壌類型	目標収量	三要素 (kg/10a)			窒素施用量(kg/10a)			備考
			窒素	リン酸	カリ	基肥	中間追肥	穂肥	
平坦	粘土型	540	15	11	13	7	5	3	(同上)

大豆後

地域	土壌類型	目標収量	三要素 (kg/10a)			窒素施用量(kg/10a)			備考
			窒素	リン酸	カリ	基肥	中間追肥	穂肥	
平坦	粘土型	540	10.5	8.5	8.5	6	3	1.5	(同上)



はるか二条 ニシノホシ



成熟期の大麦「はるか二条」

大麦炊飯後の褐変



しらゆり二条 ニシノホシ

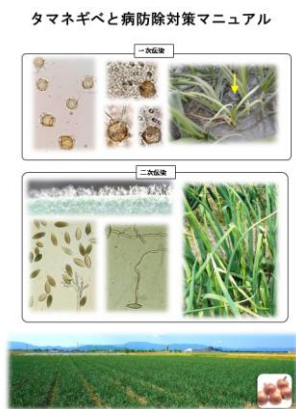
※写真は九州沖縄農業研究センター提供

トピックス

タマネギベと病検討会を開催しました

病害虫・有機農業研究担当及び露地野菜研究担当では、令和元年8月19日に、タマネギベと病検討会を開催し、農林水産省「革新的技術開発・緊急展開事業」の共同研究で得られた成果を発表しました。

本検討会には、県内外から約160名のタマネギ関係の普及指導員、JA職員、研究者、行政担当者、各企業の方々に参加され、共同研究の最新の成果を共有するとともに、今後のべと病対策について、熱心な議論を行いました。



検討会の様子

より辛みの強いワサビ軟白葉の栽培法を確立しました

佐賀県の中山間地では、雨よけ土耕栽培で葉ワサビが栽培されていますが、一般に夏越しのために5月に地上部を刈り取って掘り取り、冷蔵庫に保管します。

その際に出葉する軟白葉は、辛みが強く通常の葉ワサビより高い単価で販売されています（10月収穫）。

山間農業研究担当では、ほ場での軟白葉生産を試みた結果、3月に地上部を刈り取り、10～15日程度遮光資材で100%遮光することで、3月～4月に軟白葉を収穫でき、しかも5月に刈り取るよりも収量が多いことが分かりました（図1）。

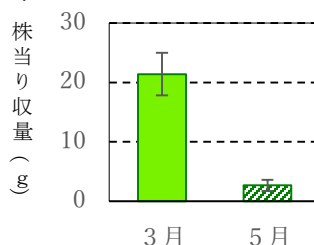
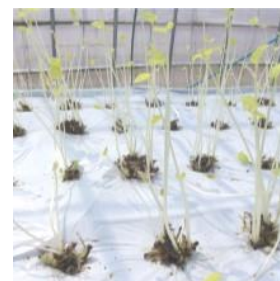


図1 地上部刈取時期の違いによるワサビ軟白葉の株当たり収量



ワサビの軟白葉

JICAの要請によりウガンダに職員を派遣しました

ODA（政府開発援助）の実施機関であるJICA（独立行政法人国際協力機構）の要請を受けて、当センター山間農業研究担当の金子主査を、11月6日から11月27日までの22日間、東アフリカのウガンダに派遣しました。

今回は、JICA「米振興プロジェクト」によるもので、日本から水稲技術指導者としての派遣でした。

国立作物資源調査研究所（NaCRRI）からウガンダ東部の水・陸稲地帯を巡回し、佐賀県における普及指導や稲作技術の経験を踏まえ、肥料のやり方や栽培指導など生産拡大に必要な基本的な栽培技術についてアドバイスを行いました。



アフリカから種子生産研修生を受け入れました

10月21日から、アフリカ中部にあるカメルーン共和国、コンゴ民主共和国及びコンゴ共和国から水稲種子の生産技術や生産体制に関する情報収集のため、それぞれの国の担当者や民間団体担当者並びにJICA担当者が佐賀県を訪問されました。各国ともコメの消費量が拡大し、東南アジアからの輸入量では不十分な状況で、自国での増産が急務となっています。しかし、1枚の水田の中に複数品種が混じった状態で生産が続けられており、均質な種子の増産も重要な課題となっています。

このため、一般田と採種ほとんどの管理の違い、採種ほの審査方法、種子生産施設、種子協会、JA、県各機関の役割などについて研修されました。さらに、当センターの資料館も見学され、佐賀段階や新佐賀段階等の歴史についても学ばれました。

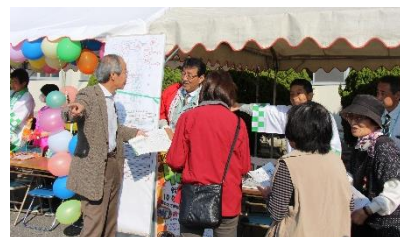


トピックス

農と食のふれあいまつりを開催しました

令和元年11月9日に一般公開「農と食のふれあいまつり」を農業技術防除センター・佐城農業改良普及センターと合同で開催しました。

試験成果や普及のパネル展示、試験中の園芸施設の案内、お米の新品種候補の試食などで各機関の仕事の内容を紹介しました。また、営農なんでも相談や新規就農相談、イノシシの「シシしゃぶ」の試食、収穫した稲の脱穀・精米の体験、サツマイモ掘り、農産物販売などを行い、農業に触れていただく催しを開催しました。当日は天気にも恵まれ、たくさんの方々に来場していただきました。



トピックス

農研機構九州沖縄農業研究センターでの長期研修

(作物栽培研究担当 特別研究員 岩城雄飛)

令和元年8月から3ヶ月間、福岡県筑後市の農研機構九州沖縄農業研究センターにおいて、長期研修を受講しました。

研修では、大豆生育期における過乾燥に対応した栽培技術の開発に向けて、土壌水分等測定手法の習得や生育期の灌水試験等に取り組みました。灌水試験では、安価で多数設置できる測定装置を作成し、土壌の水ポテンシャルを測定する方法や作物体の水ストレスの評価方法について検討等を行いました。これにより生育期間中の降雨や灌水による土壌水分の変化を確認することができ、今後の試験や技術開発に生かせる技術を習得できました。

また、スマート農業一貫体系の現地実証にも触れることができ、スマート農業の現状や課題について勉強することができました。また、実際に使用した農業者の声を直に聞くことにより、導入した場合の有効性や課題を知ることができ、今後の活用法や試験研究機関の関わり方について考えるよい機会となりました。



自作テンシオメーター

自動運転コンバイン

作物育種研究担当の紹介

当研究担当では、米・大豆・麦類の品種開発・選定を行っています。これまでに、水稲では「夢しずく」「さがびより」「たんぼの夢」天使の詩「さがの華（酒米）」「紫黒米」、大豆では「むらゆたか」「佐賀黒7号（黒大豆）」などを育成し、麦類では「サチホゴールド」はるか二条「チクゴイズミ」などを選定してきました。

現在、水稲では病害虫に強く多収・良食味、大豆では早生で多収・良質、麦類では病害や穂発芽に強く多収・良質を目標に品種開発・選定に取り組んでいます。また、佐賀県で奨励品種となっている米麦大豆の原々種や原種も生産しています。



発行所

佐賀県農業試験研究センター

(企画調整部 企画・スマート農業研究担当)

〒840-2205 佐賀県佐賀市川副町南里1088

TEL 0952-45-2142

FAX 0952-45-8801

E-mail nougyoushikensenta@pref.saga.lg.jp

佐賀県農業試験研究センター

検索

当ニュース記事を利用される場合は、御一報ください。